巻頭言

総合文化研究所長　関口時正

暖かい季節、晩方になれば、外大のキャンパスでも蝙蝠がたくさん飛んでいるけれども、多くの学生がそれを知らない。これはどういうことだろうかと思う。蝙蝠という言葉は知っているし、そこに蝙蝠はいるのだが、見えないのだ。

鳥の声のようなものをスピーカーから流す駅がたいへんな勢いで増えている。いわゆる『交通バリアフリー法』施行の一つの〈成果〉でもあるようだが、法令には「音による案内」としか規定されていない。何の鳥ともつかない、人工的なものもあるが、明らかにたとえばコマドリであるとかカッコウであるとわかるような具体的な音声も多い。コマドリが決して棲息も通過もできない場所で、決して囀るはずもない季節に、その声を否応なく聞かされるというのは何ともやりきれず、恐ろしい。

なぜその場所で耳にするはずのない鳥の声が必要で、なぜ多くの人がそれに耐えられるのか。修辞を弄するな、耐えている訳ではない、むしろ好んでいるかあるいは無頓着なだけだと言われるだろうが、そうであれば、そういう好みなり神経は破壊的であるとしか言いようがない。砂防ダムなどを、風雨によって壊されては作り、壊されてはまた作りしながら、コマドリの渓流を最終的に破壊できるのはそういう神経だからである。コマドリの声も姿も認識できない段階に達してはじめて、コマドリの徹底的な破壊は可能になるからである。

もう四半世紀以上も昔、深川に芭蕉記念館ができたというので行ってみると、玄関の自動ドアを通るたびにやはり人工的な鳥の囀りもどきの音が流れるので、芭蕉はこれをどう思うだろうかと連れの学生たちに訊いたこともある。まだ東工大に勤めている時で、〈日本的自然観〉と呼ばれるものについて再検討するという授業の一環としての見学だった。深川を起点にして、それから学生たちと奥の細道を辿る旅行に出たのだった。

この記念館では句会や俳句教室なども行われているようだが、破壊的な鳥の声の流れる、廃墟とすら呼べないあの建物で、そういう営みが行われ続けているという情況をうまく説明し、名指すことがやはりできない。